6　タイ

ムラに旅芸人がやってくる

重冨真一

タイ農村の仏教と娯楽

都市においては、人々が各々の生活リズムをもち、それに応じて余暇の取り方もばらばらになる。そこで人々は各人が好きなときに娯楽産業のほうへ出かけて行くことになるが、そのような気まぐれな客ばかりでも十分な客数を確保できるほど、そこには人々が集中して住んでいる。ところがタイの都市人口は、一九八九年の統計で見ても一八％ほどでしかないから、八割以上の人々が住む部分（以下「農村」と呼んでおこう）では、娯楽産業のほうが人々の集う所に出向いて行かねばならない。

タイの農村で人々が集う機会の最も多いのは、なんらかの共同の祭祀、とりわけ仏教寺院での儀式においてであろう。タイの農村における仏教寺院は、地域住民の募った基金で建設され、また住民の日々の支援（僧侶への寄進）に依存している。逆に地域住民は寺の存在によって平

和と安寧を与えられる。また寺はかつて村の子供の教育の場であり、現在に至るまで人々の集う広場を提供するところであった。つまりタイ農村の寺院は、地域住民の精神的支柱であり、連帯の中心なのである。

このように寺が地域の人々とともに存在しているために、寺の行事は民衆の生活リズムと密接に結びついている。これから農作業の季節になろうというとき、あるいは無事収穫が済んだとき、人々は寺に集い、祈りを捧げる。そのようなときにこそ、タイの民衆社会の伝統的娯楽が現れる。

寺の大きな行事が近づくと、村の寄り合いの議題には「どのような娯楽を企画するか」というのが必ずあって、普段は村長からの一方的な事務連絡に終始するような村でさえ、かんかんがくがくの議論になる。たいていはモーラム（主に東北タイで）やリケー（主に中部タイで）と呼ばれる旅回りの一座を招くのだが、その内容や各座の知名度によって興行代が違ってくる。そうすると、興行代をまかなう寄付金を出さねばならない村人としては、娯楽の質と自分の懐の兼ね合いで、どうしても議論に熱が入るのである。

モーラム＝東北タイの伝統娯楽産業

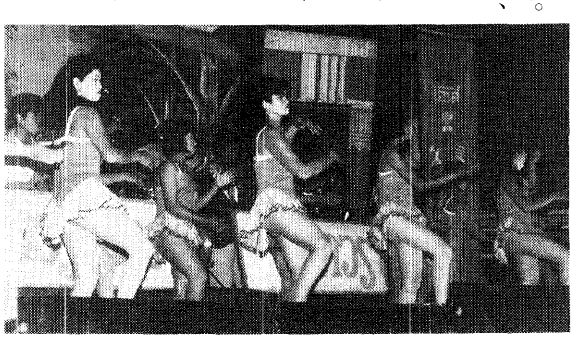
私が住んだ東北タイの村でも、村の大きな行事には必ずモーラムが来た。当日の昼過ぎになると、招かれた一座が乗り込んで来て、舞台の設置などを村人の協力を得ながら始める。幕が開くのは夜八時過ぎ。その頃に

なるとござを抱えて人々が集まりだし、村の広場や寺の境内を使った会場はみるみるうちに人でいっぱいになってしまう。

モーラムにもいろいろな種類があるのだが、最近の流行は、芝居あり音楽ありのいわばバラエティー・ショー風のものである[1]。エレキギターやドラムといったバンド付きで、歌手がポップスを歌えば、その後ろではミニスカートの女の子たちが足をあげて踊っている。目前で繰り広げられるテレビでしかお目にかかれないようなシーンに、村の老若男女は大喝采を送るのである。

そのうち必ず酔った若者がお捻りを踊り子や歌手に手渡さんものと、舞台下まで出てくる。困るのは、お捻りを渡すついでに、踊り子の手を握って離さないという輩が大抵いること、時に若いファン同士の醜い喧嘩が発生することであろうか。

このモーラムの「モー」というのは、芸に秀でた者、「ラム」とは長い歌謡や物語のことを意味する。つまりもともと

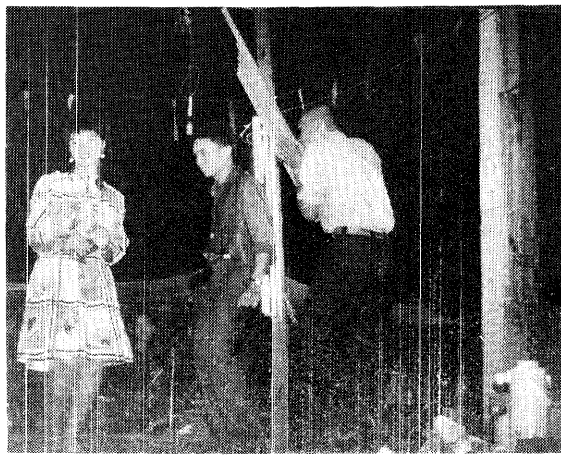


モーラムが来た（女の子たちの華麗なダンス・ショー）

儀式のおりなどに、東北タイの古い物語や、仏教説話などを節をつけて語って聞かせたものであったという。モーラム師は、長い物語を記憶し美声をもつというだけでなく、仏教や道徳、時事問題、あるいは地方ごとの故事に至るまで精通していなくては務まらず、まさにその道のプロであった。だからこれは、東北タイに最も古くから存在した娯楽産業なのである。

ところで、東北タイの住民の多くはラーオ系タイ人である。アユタヤ王朝からバンコク王朝とタイの支配勢力となってきたシャム系タイ人からすれば、自己の支配領域内にモーラムという異文化が流布しているということになる。十九世紀半ばに西欧列強が東南アジアに迫ったとき、領域国家としての体裁を急速に整える必要に迫られたタイの支配者は、ついに一八六五年にモーラム禁止令を出すに至った。モーラムがはやって、タイの伝統芸能を楽しむ人々が少なくなっている、というのがモーラム禁止令を出したラーマ四世王の状況認識であったというから、当時すでにモーラムはラーオ族以外の人々の心をとらえていたのであろう。だからこの禁止令にもかかわらず、モーラムは現在まで生き延びている。

伝統的なモーラムには、一人のモーラム師が一人芝居のごとく説話を語って聞かせるもの（モーラム・ルアン、あるいはモーラム・プーン）や、二人（たいていは男女一人ずつ）のモーラム師が掛合いの歌合戦を演じるもの（モーラム・コーン）がある。前者のほうはすでに廃れてしまったようだが、後者のほうは現在でもお目にかかることができる。一人のモーラム師が歌



モーラム・コーン」いちばん右の男性が吹いているのがケーン」

で問いかけをすると、もう一人がそれに当意即妙に歌で答える。声の良さはもちろん、この問答にどれだけの知識とユーモアを盛り込むことができるかが、モーラム師の芸の見せどころなのである。すぐれたモーラム師ならば事前の打ち合わせをせずに演じるし、時にはまったく面識のないモーラム師同士が競演することもあったという。だから良いモーラム師はかなりの興行代を稼げたらしく、筆者の知人で、現在七一歳の元モーラム師によれば、四十～五十年前には一回の出演料で一年に必要な米の購入代金をまかなえたという。

また伝統的なモーラムには、ケーンという日本の笙のような楽器の伴奏が不可欠である。軽快で、かつどことなく物悲しいケーンの音色と、小節のきいたモーラム師の歌声は、津軽三味線

のリズムに乗った東北地方の民謡を聞いているような錯覚すら呼び起こす。

このモーラム・コーンは、大きな舞台を必要としないから、屋敷地の一角を使って行われることが多い。三メートル四方ぐらいの即席の舞台を作ると、背景は高床式の住居と真っ暗な夜空である。そして周りを取り囲んで座る観客にモーラム師が語りかけるように歌う（前ページ写真）。観客はみな見知った者たちであり、そこには共同の娯楽の素朴な一体感がただようのである。

村に来る商業映画

モーラムの他に、農村によくやって来る娯楽産業として映画がある。タイの映画は、一九〇四、五年ごろ日本人が日露戦争の戦記映画を持ち込んだのが初めだという[2]。一九三〇年代に有声のものがタイに入ると、映画は急速に広まっていき、都市の主要娯楽産業であった演劇を廃れさせるとともに、地方ではモーラムの強力なライバルとなった。

モーラムと違って、映画は村の祭祀とは関わりなくやって来る。そして村の広場に幕を張って囲いをし、入場料を払った者だけが映画をみられるようにするのである。

我が村では、いつも寺の前の小さな空き地を借りて、多いときには毎週のように映画が掛かった。たいていはアクションものかホラーものであり、夜中の二時三時までやることがしばしばである。ある晩、ポルノ映画が掛かったのには驚いた。幕を巡らしただけの映画館であるか

ら、スピーカーからでる喘ぎ声は、目の前の寺はもちろん、村全体に響いたのである。どうもその場面になると、観客の歓声が上がっているようだ。翌日村人に聞いたら、「子供も女もみんな来て見ている」というので、もう一度びっくりした。

映画の場合、観客は個人として娯楽を享受し、そのコスト（入場料）を支払っている。そこにはモーラムのような共同で娯楽を組織するという側面はなくなっている。つまり都市的な娯楽産業のありかたに近づいているといえよう。ポルノ映画が掛かるのも、さもありなんというところか。

娯楽の個人化　タイの農村でも、もはやテレビはごく普通の家財道具のひとつになってきた。電気の来ている村の割合は一九九一年で九五％にものぼり、農村部でテレビを持つ世帯の比率は、八八年時点で四〇％を超えている。[3] 毎晩、きらびやかな都市の生活を扱った連続ドラマが放映されていて、各家庭でテレビを楽しむという娯楽のパターンが農村にすら一般化しつつある。また最近は交通手段が発達してきて、映画館など娯楽施設のある近在の街までバイクでひと走り、ということもできるようになってきた。農村においても、人々が個人として娯楽産業と結び付く傾向にあることはまちがいない。

しかし、見知った者たちがモーラムの芝居に泣き笑いする感動は、街に出て行っても決して得られないであろう。たとえ村に来る映画が、個人としての客を集めていようとも、農村の空

間はそこに住む人々皆によって共有されている。だからスピーカーから出された音は、村人すべてが共有してしまうのだ。聞くところでは、わが村の役員は、今後ポルノ映画を掛けさせないと決めたという。その一方で、映画の興行主から場所代として三〇〇バーツ（一バーツは約五円）ほどを取り、それを村の共有基金として用いている。一九九一年一年間で商業映画屋から取った場所代収入は九五〇〇バーツにもなり、村の集会所の電気代や村の広場の塀の建設費など、共同の利益のために使われたのだった。

注（1）　この種のモーラムは大人数で一座を組んで演じるので、モーラム・ムー（「ムー」とは、群をなしていることの意）の一種として理解されているようだ。仏教説話や物語に重点のある伝統的なモーラムに比べ、楽しさを強調することからモーラム・プルーン（「プルーン」とは楽しさに夢中になるという意）、あるいはモーラムを現代に応用したものということでモーラム・プラユック（「プラユック」とは応用の意）などとも呼ばれる。ここでのモーラムについての記述は、*Sara khadi* (*Feature Magazine*, タイ語）第六〇号（一九九〇年二月）、およびスティン・サノーンパン「モーラム＝過去・現在」（*Ruam bothbuam prawatisat*〈歴史学論纂、タイ語〉第一五号、一九九三年二月）、国家文化委員会編"Kan samana thang wichakan ruang watthanatham phuen ban : korani isan"（学術セミナー「地方文化――東北タイの場合」、タイ語）、バンコク、アマリン・プリンティング、一九八九年、一六八～一七六ページを参考にした。

（2）サグアン・アンコン *Sing rack nai muang thai*〈『タイで初めてのもの』タイ語〉第三巻（第三版、バンコク、プレーピッタヤー、一九八六年）、一六八ページ。

（3）タイ地方電化公社資料および Thailand, National Statistical Office, "Household and Socio-economic Survey, 1988."

（しげとみ　しんいち／アジア経済研究所地域研究部）